

# 令和元年度 第42回播同協研究大会

令和2年2月1日(土)13:00~16:30 播磨中学校体育館・視聴覚教室

昨今の様々な人権のことについて話し合う播同協研究大会が実施されました。全体会では、会場が満席で立ち見が出るほどの盛況で熱気を感じる中、開会行事が実施されました。播磨町人権・同和教育研究協議会会長の藤本一彦氏の挨拶、来賓代表としてこられた播磨町長清水ひろ子氏からの祝辞に続き、人権標語・ふれあい写真の入選者等の表彰がありました。



続いて、「あきらめない心」という演題で日本初義手の看護師、北京・ロンドンパラリンピック競泳日本代表の伊藤真波氏から講演していただきました。

伊藤さんは、幼少期から好奇心が旺盛で水泳やピアノ、バイオリンなど何でも取り組む活発な子どもでした。しかし看護学生だった二十歳のある日、自分でバイクを運転していて大型トラックと衝突、命は取り留めたもののこの事故で右手の肩から先を切断し、夢と希望をなくしてしまいます。看護師になるという夢を諦めかけていた伊藤さんでしたが、入院中に見た足のない人や半身不随の人々の車椅子バスケットボールをする姿に心を打たれ、「自分で起き上がり、這い上がれる人になりたい!つらいことがあってももう言い訳はしない!!」と心に決めて水泳を再び始めます。22歳の時にはパラリンピックで100m平泳ぎで見事第4位に入賞しました。「支えられた人たちに恩返しをしたい一心で泳いだ。」そうです。



伊藤さんは常に寄り添い支えてくれた母親のためにバイオリンも再開し、特注の義手をつけて練習を重ね、イベントなどで披露するようになりました。常に前向きに生きることを決めた伊藤さんは、結婚もし、二人のお子さんも育てておられます。「子育ても苦労しましたが夫の助けもあり今では何も不自由していません。地域の人にも見守られ、温かい人が多いこの場所で自分らしく過ごしたい。」と語っていた笑顔が印象的でした。



最後にご主人と二人のお子さんを壇上に向かえ、温かい拍手が体育館全体に広がる中、講演会が終わりました。

15時すぎから、播磨中学校の三階の視聴覚室で地域部会が実施されました。4つの自治会が実践発表をしてくださいました。野添コミセン区からは、五反田自治会の発表がありました。

公民館もなく、取組も少ない実情の中、野添コミセン区のふれあい運動会に積極的に参加したり、ふれあい活動を進める中で人権講演会を子ども向け大人向けに分けて実施したり、地域の中に残っている行事を積極的に捉え、その中で地域の繋がり作りを始めたことがとても印象に残っています。少しでも五反田地区の人たちの繋がりが深まったらいいなと思いました。



他にも3つの自治会の発表と4つの自治会の紙面発表がありました。いずれの自治会も現状にあった取組がなされていました。今後ともお互いがきちんと見える地域の繋がりを深めるため、できることから元気よくやっていきましょう。



この研究大会のためにご苦労・ご尽力してくださった全ての方々に感謝し、これからも毎日のあいを大切に生きていくことを決意し、結びの言葉としたいと思います。